

建立から一〇四年、日本人島民の帰還を待つように 太平洋を望む高台に建つ馬頭観世音石碑（勇留島）

像・石碑等



建立から104年。高さ180cm、推定1トンの石碑は、日本人島民が島を追われた後も島を守るように建っている
(2017年8月撮影)



太平洋を見つめ、ひっそりとたたずむ馬頭観世音石碑。写真右上に見える岬から石を切り出して、運んだ



土台はロシア側の手によりコンクリートでしっかり固められ、保存されている

戦前の勇留島には、昆布

を運搬するために馬が飼われていた。島の暮らしには欠かせない労働力であり、家族同様に扱われたという。亡くなった馬の供養のために建てられたのが「馬頭観世音」の石碑で一九四七年（大正三年）の建立と伝えられる。

太平洋側に突き出た岬から石を切り出し、当時学校があった裏手の丘の中腹まで馬車で運んだという。島の学校に通っていた根塚和夫さん（八十六歳）は、石碑のあるところまで登ってよく遊んだ思い出がある。

高さ百八センチメートル、幅五十七センチメートルほどの石碑の表面には「馬頭観世音」と彫られており、大正から昭和初期にかけて根室の振興発展に尽くした政治家・小池仁郎の揮毫と伝わる。

根塚さんによると、一九

六六年（平成八年）に訪問した時、倒れて草に埋もれていた石碑を確認した。その時は、推定一トンもある石碑を建て直すことはできず、そのままにしてきたが、二〇〇〇年（平成十二年）に訪問した時に、当時島に駐屯していた国境警備隊の隊長に立て直しを依頼、二〇〇四年（平成十六年）の訪問の時に、コンクリートの土台の上をしっかり据えられていたのを確認したという。

二〇一六年（平成二十八年）、国後島のクリル自然保護区の研究者が勇留島を調査した際、この石碑を「発見」したというニュースがサハリンで報じられた。「この石碑は十九世紀末から二十世紀初頭に建立されたと考えられる」として、クリル自然保護区は、この石碑を重要な文化遺産として保存する方針を示した。